
真剣で正義の味方に恋しなさい

パン屋のウィットニーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で正義の味方に恋しなさい

【Nコード】

N4363Y

【作者名】

パン屋のウィットニーさん

【あらすじ】

川神市。

関東の南部に位置するこの政令指定都市にはほかには無い特徴があった。川神院と呼ばれる武術の総本山が存在しているのである。そしてそこには一人の戦いに飢えた女性が居た。満たされぬ思いを抱えた彼女のもとに一人の青年が流れ着いた。だが、彼はなんと正義の味方だった!?

第1話 目覚め

第1話 目覚め

川神市

関東の南部に位置する政令指定都市であり、江戸の昔より栄えた街である。それだけならば日本によくある大きめの地方都市と変わりがないのであるがこの街にはそういったよくあるベッドタウン群とは違う特徴がある。いや、確かに極端に治安が悪い裏通りが存在するのだとか、首都圏にありながら海と山とに囲まれ非常に自然豊かであるという点も挙げられるのだが、それらはある一点と比べて特徴足りえない。この川神市の最大の特徴、それは川神院という武道場が存在するということである。川神院は武術の総本山とさえいわれ、そこには『武神』川神鉄心が座する。それがこの川神市の特徴である。そして当然そこには日々鍛錬に励む武術家やその弟子も居る。そしてここにも鍛錬に励む一人の少女の姿があった。

「いつちに、いつちに！」

自分に掛け声をかけながら走る少女が居た。赤みがかった茶色いロングヘアを頭の後ろで纏め、体操服に身を包んだ少女である。そこまでならば部活動などでよく見る光景であるのだが、彼女はただ走っているだけではなかった。その腰にロープを巻きつけ、タイヤを引きずっているのである。確かにそれは漫画などでトレーニン

グの定番として描かれることが多いが、実際に行うものは稀である。しかしそれを素直に実行してしまうあたり、この少女の純粹さと純粹さが現れているともいえるだろう。

「走りこみ終わりっ。次は型の練習！」

そういうと少女は今度は武術の型らしきものの練習に入ろうとしたが、そのとき後ろから声がかげられる。

「ワン子。今日もがんばってるな！」

「あ、大和じゃない。今から型の練習に入るの！」

元気よく答えると、少女　ワン子と呼ばれていたが、恐らくはあだ名であろう　は、再び型の練習へと戻る。

「ワン子はいつも通り特訓中。邪魔しちゃ悪いし先に帰るか」

先ほど大和と呼ばれた青年が仲間と思しき集団に声を掛ける。集団といつても彼を合わせても三名の小さなものであったが、その中の良さは見て取れた。一人は短く刈られた髪に健康的に焼けた肌と、その体に蓄えられた筋肉からなるがっしりとした体つきをしており、もう一人はそれとは対照的にあまり日に当たっていないことによる白い肌とひよろりとした体である。大和はその中間というところわかりやすいだろうか。

「そうだね。僕も家に帰ってやることもあるし、賛成だよ」

「俺様も帰ってから更に筋肉を鍛えないといけないしな」

ひよろつとした青年はともかく、がっしりした青年はまだ体を鍛えたり無いらしい。『体を鍛える』それはよいことではあるのだが、彼の場合頭の中身も同時に鍛えたほうがいいような気がするの、思い過ぎだろうか。そういった会話を交わしながら、彼らはその場から立ち去った。無論その間も少女は鍛錬を続けていた。ち丁度基本動作となる無手での型が終わったようである。だが、それだけで終わるのではなく長柄の武器、薙刀と呼ばれる獲物を手にして更なる型を繰り出す。それが彼女の獲物なのである、その動きは無手の時よりも更に滑らかであり、また力強かった。彼女は十分だと思つまでそれを繰り返したのだろう、肺に溜めた空気を吐き出し鍛

鍊を終え岐路に着いた。

「あれ……あそこに倒れているのって人？」

彼女が自宅へと帰る最中、河川敷に倒れている人間を見つけた。いや、河川敷に人間が倒れていることはよくあることなのだ、特にこのあたりでは。

「お姉さまに挑戦しに来た人じゃないみたいだし、それに戦ったような形跡も無い。家に行けばおじいちゃんやルー師範が居るし、それに倒れている人を見捨てるなんてできないわ」

そう言うと彼女は地面に倒れ付していた青年をおぶると、再び自宅に連れて帰るべく歩みを進めた。

意識が闇から引き上げられる。そういえばまだお父さんが生きていたころには、修行でこの感覚を味わったことがあったなと懐かしい思いを抱き僕は覚醒した。感覚からするとどうやら布団に寝かされていているようだ。部屋の中は薄暗かったが、すぐに自分の部屋では

ないことには気がついた。そもそも自宅ではベッドで寝起きしていた。さてそうなるここは自宅ではないことになるのだが、いったい誰が自分を連れてきてくれたのだろうか。すぐにここを発つことになるだろうが、一目会ってお礼を言わなければならぬ。そう考えた僕はこの家の持ち主に会うべく、この部屋から出た。どうやらこことは別の建物に多くの人が集まっているようだ。だがその人数が存外多いことに驚いた。そこに向かえばおそらくこの家の住民には会えるだろう。ほどなくしてその場所に着いたのだが、どうもそこは住居ではないらしい。扉を開けて中に入ってみるとそこは道場だった。なるほどこれならばあの人数も納得できる。そんな僕の姿を見つけたのか、一人の女の子が近づいてきた。

「あ、気がついたのね。川の土手で倒れていたからここまで運んだんだけど、痛いところとか無い？」

どうやらこの子が僕をここまで運んできてくれたらしい。しかし川の土手で倒れていたとはどういうことなのだろうか。確かに家の近くには川があったが、僕はあるとき川からは相当離れていたはずだ。だが助けてくれたのだからきちんとお礼を言いたい。

「あなたが僕をここまで連れてきてくれたんですね。ありがとうございます」

「お、お礼ってそんな。アタシはただここまで連れて来ただけだし、怪我が無いかとかはおじいちゃんが診てくれたし……」

僕がお礼を言うと彼女はちょっと照れているようだった。

「そつだ、アタシは川神一子って言つて、そつえばあなたの名前まだ聞いてなかったわね」

ああ、なんとということだろう。助けてもらっただけでなく、その恩人に聞かれるまで自分の名前を名乗らないなんて大変な失態だ。

「はい、僕の名前は……」

第1話 目覚め（後書き）

はじめまして、初投稿となります。

『正義の味方』といえばあの人ですよ！ という人がやってまいりました。彼がここに流れ着いたことでこれから先、物語はどう展開していくのか。はてさて、どうなることやら。

また、原作からして主人公最強になりそうです。まったり進行です。投稿ペースは不定ですがよろしくお願いします。

第2話 僕の名は

第2話 僕の名は

「我が名は加藤太郎。川神百代殿とお見受けいたす、お手合わせ願いたい！」

いつもと変わらない帰り道で、いつもと同じように見知らぬ挑戦者が現れた。こいつもじじいに挑戦しようとして、私を倒せたら云々と言われたクチだろう。だがそんなことはどうでもいい。

こいつはどれだけ私の渴きを埋めてくれるだろうか。心躍る戦いを期待しているわけではない。ただ少しでもいい、私の心を奮わせることが出来る相手かどうか、ただそれだけなのだ。だが現実はいつても非常だった。今までも、そして今この時も。

「わかった。いつでも掛かって来い」

私にとって相手の動きは酷く緩慢だった。つまりいつもと変わらない。これならまだワンス子のほうが早い。ああ、やはりこの相手も私の渴きを埋めることは出来なかった。否、こんなことばかり続けていたらそのうち乾ききって、ただ闘いのために戦いを求めるようになるだろう。さすがにそれを見抜いているのか、じじいが暫く後に揚羽さんとの戦いをとりつけた。彼女も来年からは九鬼を継ぐ、となれば武人として見えるのもそれが最後となるのだろうか。想定

は出来ても心中には暗澹とした思いが駆け巡る。やはり自分の心は彼女自身の口から聞くまでは納得できないだろう。勝負自体は私の正拳一発で決まった。ひどくつまらない。これならばさっさと家に帰って鍛錬をしていたほうが有益だ。相手もそのうち目がさめるだろうしさっさと院に帰るとしよう。

院に帰り道場へ向かうとなにやら騒がしかった。手近なのを一人捕まえて何があつたのか聞いてみたところ、どうやらワン子が行き倒れの男を連れ帰つたらしい。行き倒れと聞いてふと考えたが、思い出してみたところ今日は先ほど帰りがけに戦つた男以外に挑戦者は居なかつた。ならば本当に行き倒れなのだろう、珍しいことだ。程なくしてじじいとワン子達が来た。ちよいちよいと合図をしてやるとワン子が駆け寄ってくる、かわいいやつめ。そして事情を聞いてみると帰りがけに川原で倒れているところを見つけたらしい。あたりに戦つた形跡はなかつたし、私に挑戦しに来た人間でもなかつたので行き倒れと判断、ここに連れ帰つたとのことだった。そして先ほどまで、じじいやルーが診ていたが、いくつか傷を負っていたので手当てをして寝かせてあるらしい。「なるほど、そうだったのか。よくわかつた」と頭をぐりぐりと撫でてやるとすぐうれしそうな顔をしていた。もし尻尾があつたら千切れんばかりに振つていただろう。鍛錬が始めるのでワン子を自分のもとから返す。小一時間ほど鍛錬を続けていただろうか、道場に誰かが入ってきた。弟子達ならこんな時間に来ることはありえないし、そもそも見覚えの

無い顔だ。だがそいつのもとへワン子が近づいていくとなにやら話し始めた。なるほど、あれが例の行き倒れなのか。黒目・黒髪で年は私達と同じぐらいだろうか。思っていたよりしっかりとした体つきをしている。だが、だがしかし。あの服はいったい何なのだろう。遠目から見ると、黒とパステルグリーンのツートンカラーという非常に個性的な色使いが目についた。服装が特段に主張にあふれたものであるという以外はそれほど得意な点は見受けられない。なにやらワン子が奴と会話を始めたので耳を傾けることにした。

「そうだ、アタシは川神一子って言うの、そういえばあなたの名前はまだ聞いてなかったわね」

「はい、僕の名前は孫悟飯です。助けてもらっておきながら名前すら言えてなかったなんて、お恥ずかしいです」

あいつの名前は孫悟飯というのか。姓から推測するとルーと同郷なのだろうか。だがそれにしては日本語の発音が非常に滑らかだ。かなりの年数こちらに居住しているルーでさえ、発音などにまだ不自然な点があるのに、あいつにはそれが無い。私達と同じように日本語を母国語とするものそれだ。華僑という可能性もあるし、不自然に過ぎるということもないだろう。

「孫悟飯ね。あ、私は川神一子っていうの。帰りにあなたが川原に倒れていたから行き倒れかと思ってうちに連れ帰ってきたの」

川原で拾った行き倒れの青年の名前はどうかやら孫悟飯というらしい。街ではあまりに見かけない色使いの服を纏っている以外は特に不審な点もなかったので、家に運んでおじいちゃんに診てもらったところ何かのショックで一時的に気絶しているだろうということだった。それならばと客間に布団を敷いて寝かせていたのだけれど、どうやら意識が戻ったので自分を介抱してくれたと思われる人を探してここまで来たようだ。結構律儀な性格をしているのかもしれない。それにしても、苗字が孫ということはルー師範のように中国から来たのかもしれない。もし中国から来たのなら、ルー師範と会話したほうが彼も安心するかもしれないし、そうでなくても華僑ということもある。ルー師範から中国国籍を持っているけれど、外国に定住している人は華僑と呼ぶんだよと聞いたことがある。自分もその一人であるとも。

「ね、悟飯って中国の人？」

「中国？ いえ、違いますよ」

違ったらしい。となると日本人ということなのだろう。ならば連絡先を聞いて家族に安否を伝えたほうがいいだろう。そう思い、彼に連絡先を訪ねた。だが少なくとも彼の口から告げられた電話番号は日本国内には存在しないものだった。どうしたら電話番号が16桁になるのだろうか？念のために住所も聞いてみたが、それも「東の439地区です」との回答だった。どこよそこ……、日本国内にそんな地名の場所があるとは思えない。果たして彼はいったい何者なのだろう。

「孫悟飯ね。あ、私は川神一子っていうの。帰りにあなたが川原に倒れていたから行き倒れかと思っつてうちに連れ帰ってきたの」

おかしい。僕は確かにあの時死んだ。それなのになぜ。それにあの場所には川はおろか街などなかったはずなのだ。それなのに僕を助けてくれた人が言うには川の傍に倒れていたという。しかも街の中を流れる川だ。さらに不思議な点はあのときの僕の服装はお父さんと同じ色の胴着だったはず。それなのになぜグレートサイヤマンの服を着ているのだろう。あの時、善のブウがやられて、ミスターサタンがベジータさんをつれて逃げ出した。だけとお父さんの体力が足らなくて元氣球が押し返された。デンデがナメック星のドラゴンボールでお父さんの体力を回復させようとした。だけど駄目だった。孫悟空の持つ力は自分を大きく超えている。ゆえに体力を元に戻すことはできないと。だから僕は、ラディッツが地球に来たときにお父さんがしたように、地球もろとも自爆しようとしたセルからお父さんが体を張って守ってくれたように、僕も界王神様に頼んで界王神界に送ってもらい残った力を振り絞ってブウをその場に貼り付けた。お父さんが元氣玉でブウを倒せるように。お父さんは「すまない悟飯」って言うってくれたけど、僕はとつてもうれしかった。今までお父さんに守られてばかりだったけれど、やっとお父さんの役に立てたんだから。そしてブウ諸共元氣玉に飲み込まれ、僕は死んだはずだった。だけど僕はあの世に行かずにここにこうして生きている。だけれど生きていることは確かだ。はやく家に帰ってみんなを安心させてあげたいと思った。

「ね、悟飯って中国の人？」

「中国？ いえ、違いますよ」

チュウゴク？ そこはどこなのだろう少なくとも僕が知る範囲ではそんな地方はなかったと思う。ひょっとしてすごく遠くまで飛ばされてしまったのだろうか。ここに来る途中の中庭からうっすらと

見えた月の様子からすると、ここは地球であることは間違いないと思うのだが。その後、彼女は僕の連絡先と住所を聞いてきたので答えただけけれど、なぜか困ったような表情になって黙ってしまった。やはりかなり遠くに来てしまったのだろう、僕達が住んでいた東の439地区のような小さな村のことはわからないようだったが、電話番号については問題なく通じるはずだと思う。ひよっとして電話番号から大体の場所がわかって、あまりに遠くてどうしようと思っているのだろうか。それなら心配ない、西の都の位置がわかればそこまで飛んで行って家に戻れば何とかなる。

「ご心配には及びません、なんとか自分で家まで帰れますよ。それですね、西の都はここからだどちらの方向にあるかわかりますか？」

「西の都？ どこよそこ？」

どうやら西の都のことを知らないようだ。かなりの大都会だから国で知らない人はほとんど居ない筈なのだけれど。ただ、サタンシティのことは知っている筈だ。あのセルとの戦い、魔人ブウとの戦いで全人類が知っているといっても過言ではないミスターサタンが居る町である。その方角ぐらいは知っていると思う。

「あ、ご存じないんですか。じゃあサタンシティの方角でもいいんですが……………」

「どこよそこ。聞いたこともないわ。日本にそんな街はないと思うけど」

「え!？」

彼女はサタンシティさえ知らないと述べた。ならばここは一体どこなのだろうか。教育水準が低いのであればそれもありうることもかもしれない。しかしこの家の規模や周りに見えた建造物から判断するとかかなり大規模な都市であることは容易に推測できるし、それに伴ってかなり高度な教育が施されていることも同じように類推できるだろう。それなのに世界で一番有名な都市といっても過言ではないその場所を知らないとなるとここは一体どこなのだろうか。僕は最

初にここは地球だと判断したが、ひよつとして地球によく似た別の惑星なのではないだろうか。そして彼女は『日本にそんな街はない』と言っていた。そして僕は日本という国を知らない。そうではないことを祈り、不安な胸の裡を隠しながら彼女に尋ねてみた。

「あの、ここって地球ですよね？」

「は？………言っている質問の意図がよくわからないんだけど、ここは地球で間違いないわよ」

彼の口から紡ぎ出されたのはあまりに突拍子もない、人によつては気が狂れていると思うのではないだろうかと思える質問だった。だって『ここって地球ですよ』なんて聞かれたら普通はそう思う。なので、私が口から最初に出てきたのが間の抜けた疑問符だったのも仕方ないだろう。そもそもその前の質問で聞いたことの無い16桁にもなる電話番号や『東の439地区』なる謎の住所。そして西の都やらサタンシティという聞いたことすらない謎の都市名、極め付きが今の『地球ですか』発言だ。とりあえず、目の前に居る青年が日本人ではないことはわかった。だとすれば彼は何者だろう。奇抜な服に余りにも常識外れな質問、それに今度はなぜか先ほどから目を閉じて何かに集中しているようだし、本当によくわからない存在だ。すると彼はふと何かに気がついたかのように集中することをやめて思索に耽りだした。それに何かぶつぶつ言っている。考えがまとまったのか、彼は私に対してまた質問をしてきた。

一子さんへの質問の解答によると、やはりここは地球で間違いな
いようだ。だがそれにしても、先ほどの会話はどうにもうまく
成り立たないしやはり妙だ。そこで僕はあることに気がついた。地
球であるというのならピッコロさんや悟天、トランクスの気を探れ
ばいいのだ。幸いにしてみんな気が大きいため容易に探せるだろう、
そう考え気を探った。だが、彼らの機が一向に感じられないのだ。
誰か一人の気が感じられないというのではなく、三人とも居るのか
どうかさえわからない。しかもほかの知り合いの気さえ存在してい
ないことが分かり愕然とした。いや、まさか、そんな……………そう
いえば昔、あんなことをブルマさんから聞いたことがあったなとい
うことを思い出した。そして僕はそれが本当かどうか確かめるべく
最後の質問を口に出した。

「一子さん。セルゲームと魔人ブウ、この単語に聴き覚えがありま
すか？」と。

そしてその答えは僕の予想を裏切らないものだった。つまり
「聞いたこと無いわ」

やはりだ、やはりこれはブルマさんから聞いたとおりのことなの
だと。

「一子さん信じられないかもしれませんが、僕は多分こことは違う
地球、つまり『異世界の地球』からここに流されてきたんだと思
います。そうでなければセルゲームや魔人ブウのことを知らないこと
に説明が付きませんし、なにより僕が生きていることがおかしいん
です。僕はあのおとき確かに死んだはずだった。だけれど僕はこうし

て生きている。ならば、何らかの原因で死なずにこちらに飛ばされ
たんだと思います」

そう、ここは僕が生きていた地球とは違う異世界の地球なのだと
そういうことなのだ。

彼は言った、自分は異世界からの来訪者だと。だけど正直信じら
れない。そんなとき、いつの間にか近くに来ていたおじいちゃんが
悟飯に問いかけた。見ればルー師範やお姉さままで居る。

「ふむ、わしはこの道場の責任者の川神鉄心というものじゃ。お主、
先ほど自分は死んだはずだといっていたがそれはいったいどういう
ことじゃ」

あ！そうだ。そういえば確かに言っていた。だけど死人が生き返
るなんてありえない。

「話すと長くなるんですが、僕達の地球にバビディという宇宙人の
魔導師がやってきたんです。この魔導師の父親が作った魔人ブウと
いうものを復活させて全宇宙の征服を企んでいたんですが、魔人ブ
ウの反逆に会い失敗しました。しかし色々あつて今度はこの魔人ブ
ウがただ破壊だけを求める存在になってしまつて、宇宙そのものが
滅びの危機に陥りました。そこで僕のお父さんやベジータさん達が
それを倒すために戦つたんですけれど、ブウを倒すための手段が最
後の最後で

ブウによって阻止されそうになりました。なので僕がブウに組み
付いて僕諸共ブウを消し去り、僕も死んだはずだったんです」

あまりにのことに頭がついていかない。宇宙人、宇宙征服、魔人ブウ、宇宙の危機なによそれ。視界にちらりと入ったおじいちゃん達もなんともいえない表情をしている。それはそうだろう。しかしそのとき

「おい、孫悟飯！」

お姉さまから声が掛けられた。さすがお姉さまあんな意味不明な状況でもいち早く立ち直るなんてすごい。

「私と勝負しろ」

「まてい！百代、お主には挑戦者以外との試合の禁止を言いつけておいたはずじゃ」

「だけどな、じじい」

「百代」

「ちっ」

お姉さまが悟飯君に勝負を申し込んだけどおじいちゃんが却下しちゃった。お姉さまかわいそう……私がもっと強くなって、お姉さまの相手ができるようになりたい。そう強く思った。

ふむ。彼の話、嘘とも思えん。だが、事実だとすれば百代に何らかの影響を与えてくれるかもしれん。ここはひとつ彼に協力を要請するべきか。幸いと言っては彼に悪いが、異世界から流されてきたのならここでの生活基盤も無い。

「孫悟飯君といったかね。君は向こうではをしておったのじゃ」

「あ、はい。学生です、ハイスクールに通ってました」

ほう、それはますます好都合。ならば……

「なるほどそうかね。実はワシは川神学園の学長をしておつての、どうじゃ学院に通つてみんか。学費のことが気になるなら給費生として通うこともできる。どうかね」

給費生云々というのは彼の心苦しさが少しでも和らげばということとで出ただけであつて、こちらとしては学費ぐらいなら免除するつもりじゃ。学長はワシなのだし、経営母体も川神院なので文句も出ないじゃろう。

「え！ そんなことが……はい、よろしく願ひします。それで、給費生の試験はいつあるんでしょうか？ 多分歴史とかは違つていふと思うので、すぐにでも勉強しないとイケないと思ひますので詳しい日程とかわかりますか」

どうやら彼は給費生試験を受けるつもりらしい。勉学に対する意欲は十分、百代や一子にも見習つて欲しいものじゃ。見れば一子は信じられないものを見るような目で彼を見ておるし、百代も珍しいものを見るような目で彼を見ておる。まったく二人とも困つたものじゃ。

「給費生試験は来年度の直前に行ふことになつておる。あと3ヶ月ほどといつたところじゃ。しかしお主、3ヶ月で大丈夫なのかね」
「はい、何とか頑張つてみます。それに学者になることを目指していたので、勉強は好きですから」

ほう、学者になることが夢とは。百代と一子は『勉強が好き』のあたりでこの上ない珍獣を見つけたときのよな顔をしておつた。「ふむう。そういえば、前の学校での学年はいくつだったのかね」
「あ、はい。前の学校では1学年でした。あと3ヶ月ほどで次の学年の授業を受けるところでした」

「それは都合がいいのう。こちらでも同じ程度の進行状況じゃし、違和感無く転入できるはずじゃ。1年といふことは、一子と同じ学年といふことになるの」

「えっ、そうなんですか！」

彼は一子と同じ学年になるといふことに驚いていたようじゃが、ワシもこれには驚いた。まさか彼が通っていた学校と同じ程度の時間進行だったとは思ひもよらなかつた。これはもしかすると給費生試験、受かつてしまうかもしれないのう。さて、彼が来たことで百代は力に飲まれずに済むじやろうか。孫の未来に一筋の光明が差し込むことを願って止まない。

第2話 僕の名は（後書き）

はい、というわけで第2話の投稿になります。でも百代さん、おじーちゃんが止めてくれてよかったね。もし止めてくれなかったらピチユってました。悟飯が次の学年まで3ヶ月というのはアニメや原作の描写からの推察で、4月しづなのに転入生ということから、たぶんあの世界は9月入学なのだろうと考えました。ということは4月転入だと7ヶ月過ぎていることになるので、この時系列でも問題なく話をまわせそうだと考えました。

あと、悟飯がブウを止めた云々という件は本編とは微妙に異なる平行世界だとお考え下さい。これは悟飯を飛ばすとしたらいつが一番整合性が取れるかなと考えた結果こうなりました。色々と荒があるかもしれませんがその辺りはお察し下さい。

試験

第三話

試験

鉄心さんから給費生試験のことを教えられてから早3か月。その試験は明日に迫っていた。あのあとこの世界の教科書などを借りて自分の知識が通用するか試した。その結果、国語と英語は同じであることがわかった。言語系科目に関しては心配なさそうだ。数学と理科学に関しては、僕たちの地球のほうが進んでいるようだった。そのことを話したら鉄心さん達にどの程度進んでいるのか尋ねられたので、身近にいたブルマさんたちの一家を例に出して恒星間航行可能な宇宙船・任意倍数による重力制御装置・ポイポイカプセルなどの事を答えたら、ありえないものを見るような目で見られた。そんなにすごいものなんだとこちらが驚いていると、『ひよっとしてタイムマシンもあつたりして』と一子さんが言ったので、「そういえばブルマさんが一台作ったことがあるみたいですね。ブルマさんの子供が未来からそれでタイムワープしてきてましたし」と答えたら痛いほどの沈黙が部屋を覆った。その後、絞り出すような声で『あ……あるんだ……』と聞いていたが、ひよっとしてなにかマズかったのだろうか。その後で聞いたが、どうやらこの星の科学力ではまだ月に到達することには成功しているが、まだ火星にすらどうやったら人を送り込めるかを試行錯誤している状況とのことだった。

電気も火力発電とか原子力発電といった手段で作り出しているらしい。そういえば昔はそういう方法で作っていたと教科書で見た覚えがあった。僕が「僕たちの世界なら水で済むのにな」とボソツと呟いたら水力発電が主流なのかと聞かれたので、水で車もジェットフライヤー（飛行機）も動くと答えたら人類の夢じやのうと言われた。ブリーフ博士はすごかったらしい。とりあえず数国英理は問題ないことがわかったのだが、やはりというか社会それも地理と歴史が全く違っていた。経済や政治は細かなところ、例えば通貨単位が僕たちの地球ではゼニーで統一されていたのだが、こちらでは円・ドル・ユーロなどいくつもの通貨が存在していた。これは覚えなおせばいいだけなので、それほど問題にならなかった。政治では僕たちの世界では国王が居て平和に統治してたのだけれど、こちらではそうではないようだった。しかし、地理とも重なるのだけれど世界にたくさん国があるというのにとても驚いた。世界が一つの国であつた僕たちからすれば考えられないことだ。だからこそこちらではいろいろな政治形態があるのだなと非常に勉強になった。ただ、それぞれの国の特徴や輸出品目、輸入品目などを覚えていくのには骨が折れた。それでもまだ歴史に比べればましだった。日本史と世界史の二つがあるうえに、出来事が全く異なるのだ。僕たちの世界とは全くと言っていいほどに。800年ほど昔に初めてドラゴンボールを使ったものの願いによって世界は一つに纏まったと聞いたことがある。歴史書では全ての国が平和裏に1つの国になることに当然合意した事件として語られている。これを切っ掛けに僕たちの世界では1度も戦争が起こっていない。お父さんが退治したレッドリボン軍のような組織は存在したが、国家を巻き込んだ大戦というものはないのだ。翻ってこちらはどうか。幾度も戦争が繰り返されここ100年に限って見れば世界中を巻き込んだ大戦争さえある。悲しい歴史だなと思いつながらその歴史を頭の中に叩き込んでいった。

この3ヶ月間、学校に行く以外は毎日勉強をしていたのだけれど、

最初の一週間を過ぎたあたりで百代さんから『なんで鍛錬をしないんだ』と聞かれた。僕は給費生試験に合格するためにそれまでは鍛錬をするつもりがないことを答えたら、急に彼女の機嫌が悪くなった。なんでもお前は武術家として上を目指すがないのかなどと言われたが、僕が学んだ亀仙流の教えではよりよく生きるために武術を身につけるといふ趣旨だったので上を目指すために武術をしていくわけではないのだ。確かに強くなっていくことを実感するのは楽しいが、強くなるのはあくまで悪人を懲らしめるために必要な力なので、それに対抗できれば別に問題ないのである。確かに3ヶ月間鍛錬をしないと昔のように体がなまってしまいかもしれないが、今は勉強のほうが優先順位が上だ。「給費生試験に無事受かったら鍛錬をしますよ」と答えたら、『本当だな!？』と妙に期待に満ちた目で凄まれてしまった。ちょっと迂闊な答えを返してしまったかもしれないと反省した。

そして一夜が過ぎ試験当日になった。目が覚めた僕は妙にすつきりした気分だった。合格することに越したことはない。だけれどもし落ちてしまったとしても、それは僕がこれまでに積み上げてきたものすべてを出し切った結果なのだ、悔いは残らないだろう。朝食を頂き歯を磨いて学校に向かう。その途中で見知った顔と達と出会った。僕がこの世界に流れ着いたあと、一子の紹介で出会った人たちで、彼女の親友たちだそうだ。名前を呼び捨てにしているのは「さんはいらない!」と言われたためだ。なんでも他人行儀でこそば

ゆいらしい。なるほどそういうものかと、親しくなった人には呼び捨てて呼ぶことも多くなった。話は戻るが、彼らは学校でも一つのグループを形成していて非常に仲がいい。僕も彼らを紹介してもらってから話すことが格段に多くなった。

「みんな、おはよう」

「悟飯、おはよう」

みんなと軽く挨拶を交わして通学の輪に加わる。

「そういえば今日は給費生試験の日だよな。悟飯、頑張れよ」

こう言ってくれたのは直江大和。このグループの頭脳であり、クラスでは軍師大和とも呼ばれている。平均的な体つきではあるが、頭の回転が速く要領がいい。よく頭脳で百代さんたちに張り合おうとしては弄られているのが特徴的だ。

「おう、俺様も応援しているからな。しかし母ちゃんが事あるごとくに『ご飯くんみたいにしっかり勉強しな』とせつついてきて俺様の気苦労がさらに増えたんだけどな……」

これは島津岳人の言。ヤマトとは違いよく鍛えられた体が特徴的だ。自分のことを俺様と呼ぶので、たまにベジータさんを思い出してしまう。みんなからはそのままガクトと呼ばれている。勉強はあまり得意ではないのだろうか、授業中にはよく寝ている姿を見る。テストが大丈夫なのかちょっと心配だ。

「僕も応援しているよ」

これは師岡卓也。ガクトとは対照的にひよろりとした姿だ。彼に言わせるとガクトがゴツ過ぎるのだとか。情報機器の扱いに強く僕も携帯電話というものの扱いを教えてもらった。師岡なのでモロと呼ばれている。人見知りをするらしく、最初にあった時には目線を合わせてすらもらえなかったが、何回か会ううちに慣れてくれたようだ。

「ん、私も応援してる」

そして最後がこの中では紅一点、椎名京。言い方はそっけなかったが、これは彼女の地だ。ヤマトのことが大好きなようで、いつも

彼を見つめているしそばに居る。だが彼女の最大の特徴はそういったことではなくその味覚だ。異常なほどに辛いものが好きなのだ。僕も食べさせてもらったことがあるが、食べることに關しては他の追隨を許さないはずのサイヤ人の僕でさえ、一口でギブアップしてしまうほど。それゆえ彼女の味付けは椎名スペシャルと呼ばれてしまっている。

このように4人が銘々に励ましの言葉を送ってくれた。ありがたい。心の中にはひよっとしたら受からないかもしれないという不安もあつたのだが、彼らの言葉を聞いてその不安が薄れていくのを感じた。いつもはもう一名、風間という彼らのリーダー、通称キャツプがいるのだが、風来坊のような性格をしているようで、よくふらりとどこかへ出かけて行ってしばらく帰ってこないことがよくある。昨日からどこかへ出かけているようなので、そのうち帰ってくるだろう。しばらく彼らとダベりながら歩いていると、腰にタイヤを括りつけたロープを結って引きずりながら走っている一子がやってきた。これも鍛錬の一環らしい。リストバンドもパワーリストであるとのことだ。両方で10kgとかなり控えめな重量なのだが、これは若干の重量を加え続けることではやく手を動かすためなのだろうか。そういえば武天老師様の修行では50kgの錘から始まったなあと少し懐かしくなった。やはり3ヶ月も体を動かしていないとそれなりに疼くものなんだなと改めて実感した。

「悟飯、おっはよう！ 今日が給費生試験の試験日なのよね。アタシも応援してるからね」

「ありがとう、一子」

朝の挨拶と共に励ましの言葉を掛けてくれた彼女にお礼を言ったのだが、どうやらお気に召さなかったらしい。やっぱりアレが原因なのかなあ。

「悟飯、アタシのことは一子じゃなくてワン子って呼んで欲しいな
ーって。友達だったら当然よね」

「わ、ワン子？ いや、さすがにそれは……………は、はい。呼ばせ

ていただきます。わ、ワン子？」

さすがにそれはどうかと思い断ろうとしたら、しょぼんとした犬の幻影が浮かんできそうなほどに落胆しかけたので、あわてて彼女の言うとおりに呼ぶと先ほどとは違って変わってニコニコと満面の笑みを浮かべる。

「そう、それでいいのよ」

女の子にワン子はいくらなんでもアレだと思ったので遠慮していたのだが、彼女にとっては友達に余所余所しくされるのがよほど堪えるようだ。彼女がそう呼んでほしいというのならそう呼ぶのが筋だと自分を納得させ、これからはそう呼ぶことに決めた。

いつものように皆が揃ったのでわいわいと賑やかに登校をしていると、これまたいつものように百代さんが試合を申し込まれていた。いや、試合はいつもではないか。問答無用で襲い掛かって返り討ちにされている人達も居るので、試合を申し込む人と半々ぐらいだ。とはいえごく頻繁に彼女が登校中に戦いを挑まれているので、もはや日常風景と化していた。そしてメンバーが彼女にやり過ぎないようねと茶々をいれ、彼女はどこか不満げに挑戦者達を一蹴していく。戦いを見ていると分かるが、かなりの強さを持っていることが伺える。彼女の本気を見たことが無いので詳しくは言え無いが、いわゆる超人と呼ばれるような部類の戦闘能力を保有していることは間違いないだろう。おそらく武天老師様よりも強いことは間違いない。やがていつものようにそれが終わると彼女もこの集団に加わるのが

通例だ。しかし、相手が挑戦者であった場合にはただ打ちのめして終わりだが、そうではない場合、彼女は彼らで遊ぶことが多い。それを見ると僕はかつてセルとの戦いで自分の力に酔い、酷く残酷だったあのときを思い出してしまふ。そしてその慢心の結果、セルの自爆という結末を招き、お父さんがそれを回避するために瞬間移動で北の界王様の界王星にセルと共に瞬間移動して死んでしまったことがどうしようもなく胸を苛むのだ。それに加えて彼女の更なる問題はその残酷性だ。確かに言っても分からない連中は非常に多く存在する。そのときには力で解決するしかないことは純然たる事実だ。二度と悪さをしないように圧倒的な力を見せ付けることの重要性は僕にも理解できるし、僕もグレートサイヤマンとして活動していたときにはそうしていた。自分が絶対に勝てないと理解できた相手に諭されれば、それに従うものが多いのもまた事実だからだ。しかし彼女は違う。彼女のように倒した相手を人間テトリスなどといって遊び道具にするのはいくらなんでもやりすぎである。あれではかつて未来の世界から来たトランススから聞かされた人造人間達と同じではないか。人造人間達は自分から街を襲い、それを嬉々として楽しんでいた。彼女は自分に襲い掛かってきた人間という制限は付けているものの、やっていることは彼らのそれに近い。彼女には川神鉄心という師が居る。修行を続けていくうちに彼が彼女を諭すはずだが、それでも彼女が変わることが無かったときは、余りにも自分勝手だとは思うが、僕が彼女と戦ってそれを示すことにしよう。願わくば彼女が自分からそのことに気が付けることを、僕はここには居ないデンデにそつと祈った。

学園に到着し大和達は自分の教室へ、僕は試験を受けるために指定された空き教室へ向かう。なんでも今回給費生試験を受けるのは僕のみだそう。教室に着くと扉の鍵はすでに開けられていたが、まだ試験官は到着していないようだった。しばらく待っていると教員が入室してきた。

「君が悟飯君かい。オジサンが今回の試験監督の宇佐美巨人さ。まあ、面倒だしさっさと始めようか」

「なんとも軽い試験監督官だ。だけでも僕がやることは唯一つ、この試験を突破することのみ。」

「じゃ、配ったら始めていいから。あ、そうそう試験中の禁止事項は分かっていると思うから飛ばすよ。じゃ、始め」

その言葉を皮切りに僕は試験問題の攻略に掛かった。ざっと目を通すと、半分以上が基礎問題のようだ。8割ぐらいがそうではないだろうか。残りの2割が応用といったところか。このテストで平均80点以上取ることが今回のボーダーライン。なるほど、給費生というのは金銭的窮乏にある生徒を救うための制度だったようだ。これならばちゃんと勉強していれば受かるだろうし、学園側もある程度の学力を持った生徒に対してのみ給費生の認定をすることが出来る。うまく考えたものだ。その後も試験が続き、合計で5科目の試験が終了した。それにしても最後の社会科はかなり難しかった。やはり勉強期間が3ヶ月というのは相当に大変だ。だがやれることはすべてやった、あとは運否天賦に任せるのみである。

一週間後、いよいよ試験結果の発表のときが来た。でも、発表をわざわざ終業式の後に合わせなくてもいいと思う。それを言っても何も変わらないことは分かっているのだが、つつい思ってしまう。しかも発表場所は1名しかいなかったという理由で、何の因果か学園長室だ。そしてついに運命のときが来た。

「孫悟飯君」

「はい」

緊張の一瞬である。

「給費生試験の結果、貴君を当学園は給費生に値すると認める」

「あ、ありがとうございます！」

給費生試験に合格したようだ。これで鉄心さん達に学費の迷惑を掛けずに済むと思うと、自然に顔がほころんだ。

「ついでには悟飯君。君には来期より2・Sへの転入が認められるが、どうするかね」

どうやらSクラスへの転入が認められるらしい。だがそれは同時に、彼らと別のクラスになってしまうことを意味した。この学園は基本的に持ち上がりであるため、Sクラス以外は卒業まで同じ面子となる。

「いえ、今のままFクラスに在籍します」

それに対し、僕は今のままのクラスに留まることを選択した。勉強はどのクラスでも出来るが、彼らとは同じクラスで無ければ会えない。その選択は必然だっただろう。

「心得た。ではそのように取り計らおう」

さて、次は僕のことを応援してくれた皆に報告しないといけないな。

孫悟飯が退出した学園長室で、数人の教員が顔をつき合わせていた。

「ふむ、悟飯君はFクラスのままですか。しかしこれだけの成績を収める学生がS入りしないとは勿体無くありますね」

男性教師がなにやら考え込むようにして意見を述べる。

「しかし、彼のの自主性彼の自主性を重んじルのは大切ネ。彼がそう望むのなら、それが最善ネ」

それに対し川神学園の体育教師でもあるルーが、彼の望むようにするのが一番であると反論した。

「うむ。ワシもそう思っておる。彼がそう望むのならそうしてやるのが一番じゃ。それとも何かね、彼に決闘でも挑むかね」Sクラスに移れ」と

学園長からの援護もあり、男性教師は言いよどむ。尤もそれだけでなく、決闘システムまで持ち出されては尚更だ。いくらなんでも教師が学生に対してクラスの選択で決闘を挑むなど、嘲笑の的にかならないだろう。ただ、それでも彼は納得できないようではあった。だがそれも仕方ないかもしれない。そこには悟飯のテストの答案が並べられていたのだが、平均が92点という凄まじいものだった。確かに社会は78点と低いのだが、その他の科目が頭抜けているのだ。国語は88点であるし、英語は95点を記録している。そして数学と理科に至っては満点だ。おそらく英語は前の世界とは違う、こちらの世界独特の慣用句などの言い回しの点などで誤答が出たのだろう。

「しかしこのテストで平均92点とは、未だに信じられません。5割は基礎知識問題、3割が応用問題、残りの2割は高等教育機関で

出されるものです。そのうち半分は東大の院入試の過去問題なのですが……」

悟飯は8割が基礎問題で残りが応用問題だと思っていたようであるが、実際は違ったということだ。彼もまさか自分が応用問題だと思つたものが超高難易度の問題だとは思ひもよらなかつただろうし、ましてや給費生試験がそれほどまでにハードルが高いものであることなど、知る由も無いだろう。男性教員はため息と共に言葉を紡ぎ出した。本当に残念でならない様子だ。しかし決定は覆らず、悟飯は彼の希望通り2-Fへと進級することとなった。ただし、彼が望んだ場合はいつでもSクラスへと転入できるという条件を添えて。

結果発表を聞いた僕は門へと向かうと、僕が出てくるのを待つてくれていたのだろう、ヤマト達の姿があつた。なんとワン子とキャップの姿まである。いつもなら『先に行こうぜ』と言うであろう彼と、授業後はすぐにもトレーニングを始めるワン子が待つていてくれたということは驚きであり、それだけ気に掛けていてくれたということが嬉しかった。彼らも僕の姿を認めると手を上げて「おかえり、どうだった」と訊ねてきたが、その口調は軽く世間話でもする風だった。気を使ってくれたのだろう。

「うん、給費生試験に無事合格したよ」

その瞬間皆がわつと盛り上がり、まるで自分のことのように喜んでくれた。そのままわいわい言いながら帰宅の徒に着いたのだが、今日は珍しく百代さんが戦っていなかった。どうしたのだろうと訊

ねてみると、彼女の妹であるワン子から「お姉さまは大事な試合が近づいてきたから、その調整に入った」というようなことを聞いた。なるほど、その試合に向けて体調を整えだしたということか。彼女がそこまでするということは、相手は相当な手練なのだろう。おそらくその試合でなら彼女の本気というものが分かるのだろう。そういえば彼女に給費生試験に無事受かったら鍛錬をするといった手前、明日からでも鍛錬をすることにしよう。丁度明日から春季休業に入る。2、3日かけて鈍った体を解すことからはじめようと決めたのだった。

試験（後書き）

第三話です。ドラゴンボール世界の学校なのですが、春に転入試験を受けていることから、欧米と同じように9月入学なのではないかなと推測しました。4月入学ですと、なんで普通に入学試験を受けなかったのかという根本的な疑問とが出てきます。翻って9月入学の場合、5月に入学したとしても既に7〜8ヶ月は経過しており、途中転入の理由も説明しやすい上に、真剣恋に飛ばした場合にマッチングさせやすいという面もあります。

1月に真剣恋Sが発売されますが、その内容も反映させていきたいと思っています。当面は体験版の内容を基にして組み込んでいくことを考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4363y/>

真剣で正義の味方に恋しなさい

2011年11月20日19時02分発行